

十字路

新型コロナウイルス対策の巨額の財政支出も加わり、財政構造は一段と悪化している。今こそ賢い支出（ワイズスペンディング）が必要だという指摘をよく耳にする。しかし、財政構造がどうであろうと、お金を愚かに使ってよいということはない。少なくとも、賢い支出で財政構造が改善すると考えるのは、甘すぎる。そもそも、賢い支出というのは本当に賢いのか。賢い支出とは、より多くのリターンが見込まれるような事業に対する選択的な支出を指す。景気対策として行う支出で

賢い支出は本当に賢いか

あれば、そうした支出は賢いのかもれない。しかし、財政支出は本来、経済活動や国民の生活の基盤となるような社会資本の整備、あるいは国民生活の安心・安全の実現のために行われるべきものだ。こうした支出は短期的にはもちろん、長期的にも採算性が見込めない分野だ。いくら必要なものであっても、民間の経済活動だけでは実現しないので、財政の出番となる。しかし、賢い支出という発想が前面に出てしまうと、必要どころにお金が回らなくなってしまう恐れがある。たとえば、新型コロナウイルスのワクチン開発は、日本では、民間企業がリスクをとって開発するのが難しいよう

だ。そうであれば、政府が研究開発のための資金を出すと、いう発想があってもよさそうなものだが、リスクが大きすぎてリターンが見込めず、賢い支出とはみなされにくい。賢い支出とは、不況対策として政府が支出を拡大するのに合わせて出てきた考え方が、不況対策にお金をばらまくのは、必ずしも財政の本来の姿ではない。金銭的なリターンが見込まれなくても、日本にワクチン開発の基盤を作ることが必要だったはずだ。そうしたところにお金を使うことが、本当に賢い支出ではないだろうか。

（三菱UFJリサーチ&コンサルティング）
研究主幹 鈴木 明彦